



金子光晴 『マレー蘭印紀行』

二重作和代

本書は、1928年から1932年にかけてシンガポール、マレー半島、ジャワ、スマトラを巡った著者、金子光晴氏の旅行記である。各章は「センプロン河」、「バトパハ」、「ペンゲラン」など8地域で構成されており、特にマレー半島のジョホールのゴム園、スリメダンの石原鉱山を中心に、当地の自然、そしてそこに暮らす人々の様子が精微かつ端麗に描かれている。

昭和初期の東南アジアの風景は、開発が進んだ現代とは大きく異なるだろう。しかし、本書では現地の自然や人々の様相が、まるであたかもその場にいるような臨場感を持って描かれている。イギリス、オランダの支配下にあったマレー半島、スマトラ、ジャワでは、プランテーションや鉱山開発によって、華僑をはじめ人々の移動が盛んであった。そしてそれは現在に至るまで、当地の民族構成や文化に影響を与えている。こうした激動の中を現地で生きた日本人の様子は、大変興味深い。東南アジアに関心があれば、是非一読されたい一冊だ。



出典:

金子光晴『マレー蘭印紀行』(中公文庫、新版2004年)

関連リンク

- ・ 安場保吉「石原廣一郎と資源確保論」『東南アジア研究』18巻3号、1980年、pp.476-487
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/56028/1/KJ00000133610.pdf>
- ・ 「文藝春秋」写真資料部「西洋の伝統と文明に圧倒されながら、おのれを見つめ続けた金子光晴」
『本の話』2015年6月15日 <https://books.bunshun.jp/articles/-/3042>
- ・ さとうゆうじが見た景色～マレーシア、バトゥパハの朝の市場から旧日本人クラブまで～
<https://www.youtube.com/watch?v=0maGUqtDUK4>